

## 復活節第五主日

2014.5.18

ヨハネ 14・1-12

「わたしは道であり、真理であり、いのちである。」私たちになじみ深い、みことばです。けれども、私たちになじみ深いイエスのこのみことばは、日々の生活を生きる私たちの心に、どれほど深く食い込んでいるのでしょうか。そのことを反省するために、これに続くみことばが、私たちの心にどのような反応を引き起こすか反省してみたらよいかもしれません。

「わたしは道であり、真理であり、いのちである。」というみことばに続けて、イエスは「わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことは出来ない。」と言われます。このみことばは私たちをたじろがせます。私たちが生きる日本の社会の中で、キリスト者ではない人々を前にして、あえて、このみことばを告げ知らせる勇気を私たちは持っているのでしょうか。私たちが信じているイエス・キリストはこのように言われていますと、公言できる勇気を私たちは持っているのでしょうか。

今日の福音の前半の部分は、葬儀の儀式書の中で朗読指定箇所になっています。この箇所の中の「わたしは道であり、真理であり、いのちである。」というみことばまでは、通夜や葬儀の場で、亡くなられた信者の方を悼みつつ、お送りするのにふさわしいみことばです。キリスト教の葬儀に初めて参列しておられる皆さんの心にも届く聖書のみことばであると思います。けれども、それに続く「わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことは出来ない。」というみことばは、信者ではない参列者の方々の心にはどのように響くのでしょうか。キリスト者ではない参列者の方々が、葬儀の場でこのようなみことばを聴く時、キリスト者であった愛するその人が自分たちとは縁のないところへ行ってしまったと感じられるのではないのでしょうか。そのように思うと、「わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことはできない」というみことばをそのまま朗読することにためらいを感じてしまいます。

「わたしは道であり、真理であり、いのちである」。カトリックの信者として私たちはこのイエスのみことばを信じています。けれども、このように言われるイエスを、このみことばのままに信じるのが、この日本の社会に生きる私たちに何の異和感も何の苦痛も感じさせないとしたら、私たちはすでに骨の髄までカトリック信者になりきることが出来たか、あるいは、まだ本当には、このイエスのみことばを理解できていないかのどちらかです。

「わたしは道であり、真理であり、いのちである。」と呼びかけてくださったイエスに向って、「あなたこそ、私にとって、道であり、真理であり、いのちです」とお応えすることが、カトリック信者としての私たちの信仰です。このような信仰を受け入れて、それによって生きるためには、私たちは自分の人生に向き合わなければなりません。「わたしは道であり、真理であり、いのちである。」という呼びかけは、私たちの人生に向けて呼びかける招きであり、それに応えるということは、その招きに私たちの人生を賭けるということだからです。

家族や、職場や、友人たちとの人間的な絆の中に生きる私たちは、その中に生きる自分に目覚めなければ、本当の意味で自分の人生に向き合うことはできません。自分一個の人生に目覚め、それと向き合うということは、人間的な絆を大切にす私たちにとって勇気のいることです。私たちが自分の人生に目覚め、それに向って歩み始めようとする、私たちは自分と周囲の人々との人間関係の中で軋轢を経験せざるを得なくなります。そして、その軋轢は私たちの心に悲哀をもたらします。けれども、人は皆このようにしてそれぞれの人生を生きているのではないのでしょうか。

人間同士のお互いの絆が、私たちにとってどれほど貴重なものであっても、それぞれの人生を生きる私たちにとって、それが最終的に自分の人生を支えることが出来るものではないことを私たちは知っているはずで。愛する人の死が、私たちに深い悲しみをもたらすのは、私たちが支えていたその人との絆を死が奪い去ってしまったことを知るからです。私たちが真の意味で、自分の人生と向かい合うのはそのような時かもしれません。そのような悲しみの経験を通して、自分の人生に向き合わざるを得ない私たちに、イエスは「わたしは道であり、真理であり、いのちである。」と語りかけてくださるのです。イエスが道であるのは、支える絆を失って、自分の人生の行く手を見失った私たちに道を開いてくださるからです。

イエスはどのようにして、私たちの道となってくくださるのでしょうか。十字架の死を越えて、御父のもとに行かれたイエスは、そのいのちの世界に私たちを向かえるために、私たちのもとに戻ってきてくださったのです。それがイエスの復活です。その復活によってイエスは私たちの道、真理、いのちとなってくくださったのです。イエスの十字架において、この世に生きえる私たちそれぞれの人生の真の意味が示されたのです。この世に生きる私たちはいずれは死を迎えなければなりません。その死がどのような形で私たちを襲おうとも、イエスが示されたように、その死を父なる神のみ旨として受け入れることが、復活のいのちへの道なのです。そのことを私たちに示すために、イエスは十字架の死の闇を開いて、私たちのもとに戻って来てくださったのです。

私たちが経験している全ての苦しみをイエスはあの十字架において、ご自分の苦しみとしてくださり、そうすることによって、私たちにはその意味が分からない、私たちの全ての苦しみにも意味があることを示してくださったのです。私たちの全ての苦しみは、イエスの十字架の苦しみに結ばれることによって、イエスの御父である神に受け止められていること示してくださったのです。

「わたしは戻って来て、わたしがいるところにあなたがたを迎える」復活のイエスのおことばです。私たちの全ての苦しみを、ご自分の十字架の苦しみによって知ってくださったイエスは、苦しみの中にある私たちのもとに戻って来て、私たちを御父のいのちの世界に迎え入れてくださるのです。私たちにとって最後まで謎であった、この世の苦しみの意味を解き明かすことができるのは、十字架の死を越えて復活されたイエスだけです。「わたしは真理である」と言われるイエスを、私たちの人生の中に迎えることによって、私たちに理解できなかった私たちの人生の謎はなくなり、いのちに満ちた真理の喜びを私たちは知るのです。私たちの苦しみの全ては、出口のない闇に終わるのではなく、復活のイエスがそこに私たちの迎えてくださる、父なる神のいのちの世界への道であったことを私たちは知るのです。

そのいのちの世界で、私たちはこの上ない喜びを味わうことでしょう。「わたしの父の家には住むところがたくさんある」というイエスのことばが真理であることを大いなる喜びのうちに私たちは知るのです。この世の生活の中で、御父が結び合わせてくださった絆によって互いに支えあって生きた私たちの愛する者たちのためにも、すべての人の道、真理、いのちである主が、私たちの祈りに応えて、場所が用意してくださっていたことを知ることができるからです。

「わたしは道であり、真理であり、いのちである」。今日の福音のこのみことばが、私たちの体の中に、血の中に、深く、深く、浸み込んでゆくことを祈り求めたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高